

# BEACON 2020



展示風景〈BEACON 2020〉  
2020年、映像インスタレーション

BEACONプロジェクトチーム  
KOSUGI+ANDO(小杉美穂子・安藤泰彦)、伊藤高志、稲垣貴士、吉岡洋

BEACON Project Team  
KOSUGI+ANDO[Mihoko Kosugi+Yasuhiko Ando],  
Takashi Ito, Takashi Inagaki, Hiroshi Yoshioka

写真: 桜木美幸

ビーコン

BEACONは回転し続ける。

私たちは日々、たくさんの指示、矢印、  
信号、つまりさまざまな標識に取り囲  
まれている。あらゆるものが何かを意  
味し、何かを指し示している。この作  
品BEACONもまた、ひとつの標識で  
ある。けれど、それが指し示すもの  
は何だろう？ それはただ灯台のよう  
に、周囲に光を放ちつつ、ひたすら回  
転するだけである。

BEACONは回転し続ける。

その光が闇の中から、いくつかの風景  
を浮かび上がらせる。それは全方位的  
だが、けっして一望することはできな  
い。闇に沈んでいる世界の、わずかな  
部分が次々と照らし出されてゆくだ  
けだ。映し出されるのは、見慣れた日  
常の景色である。だがそこには、ま  
さに見慣れているがゆえに見えない  
ものが、潜んでいる。

BEACONは回転し続ける。

風景には過去が堆積している。風景  
とはひとつの記憶装置である。その  
中には、記念碑や歴史的建造物のよう  
な、歴史や文化を指し示す標識もあ  
る。それらはたしかに人目を惹き、雄  
弁である。その一方、何を意味してい  
るのか、それほどはっきりしない標識  
もある。おしゃべりではなくひそやか  
な、沈黙する標識である。

BEACONは回転し続ける。

沈黙する標識の中では、過去は過ぎ  
去ることなく、今のこの日常と、重な  
り合って存在している。本当は、これ  
らひそやかな標識たちこそが、風景  
の生命なのではないだろうか？  
BEACONが追求してきたのは、見慣  
れた日常の風景を、もう一度生命ある  
ものとして蘇生させること、であった  
のかもしれない。

BEACONプロジェクトチーム

KOSUGI+ANDO (小杉美穂子・安藤泰彦)  
現在、岐阜県在住。

小杉美穂子:1953年、大阪府生まれ。阪南大学非常勤講師。  
安藤泰彦:1953年、滋賀県生まれ。情報科学芸術大学院大学(IAMAS)・名古屋芸術大学非常勤講師。  
1983年よりユニット「KOSUGI+ANDO」として京都を中心に活動を始める。「京都アンデパンダン展」(京都市美術館)、「1995京都芸術祭」(旧龍池小学校)、「A CABINET OF SIGNS」展(タイト・ギャラリー・リバパブル他)など、国内外の個展、グループ展で活躍。また、展覧会企画として、「SKIN DIVE スキンダイブ-感覚の回路を開く」(芸術祭典「京」)や、「チャンネル-n-多層世界への水路」(京都芸術センター)がある。

伊藤高志  
1956年、福岡県生まれ。現在、福岡県在住。

京都造形芸術大学教授を経て、2016年より九州産業大学芸術学部教授。大学在学中、松本俊夫に師事し、本格的に実験映画の制作を開始。ロッテルダム国際映画祭、バンクーバー国際映画祭、オーバーハウゼン国際映画祭、釜山国際映画祭、光州ビエンナーレなどに参加・上映。ポンビドゥー・センターに作品が収蔵されている。

稲垣貴士  
1957年、高知県生まれ。現在、京都府在住。

大阪成蹊大学芸術学部教授。1981年より、松本俊夫、伊藤高志らの映像作品のサウンドを手掛ける一方で、自らも映像作品を制作する。1984年に20数名のビデオ・アーティストが集まって結成されたグループ「ビデオカクテル」に参加。アントワープ現代美術館、原美術館、東京都写真美術館、ボン美術館などで展覧会に参加。国立国際美術館に作品が収蔵されている。

吉岡洋  
1956年京都府生まれ。現在、滋賀県在住。

京都大学こころの未来研究センター特定教授(美学・芸術学)。甲南大学教授、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授、京都大学大学院文学研究科教授を経て、現職。著書に『情報と生命』(新曜社)、『〈思想〉の現在形』(講談社選書メチエ)、訳書にM・ポスター『情報様式論』(岩波現代文庫)など。京都芸術センター発刊の批評誌「Diatxt.」(ダイアテキスト)1-8号編集長。「京都ビエンナーレ2003」「おおがきビエンナーレ2006」総合ディレクター、「SKIN DIVE スキンダイブ-感覚の回路を開く」(芸術祭典「京」)の企画に参画。

〔展示作品〕  
BEACONプロジェクトチーム《BEACON 2020》  
2020年、映像インスタレーション  
サイズ可変  
BEACON回転台映像:HDビデオ 1920×1080 H264/MPEG4、約20分、映像2チャンネル、サウンド 6チャンネル  
卒業写真映像:HDビデオ 1440×1080 H264/MPEG4、約7分、4チャンネル、サイレント  
感熱カメラ映像:HDビデオ 1440×1080 H264/MPEG4、4分32秒、サイレント

〔Work〕  
BEACON 2020  
2020, Video Installation  
Size Variable  
HD Video, H264/MPEG4, Approx. 20 min., 2ch, sound 6ch /  
HD Video, H264/MPEG4, Approx. 7 min., 4ch, silent /  
HD Video, H264/MPEG4, 4 min. 32 sec., silent

## 《BEACON 2020》の撮影地

- 聖母女学院 本館〈Fig.1〉  
(京都市伏見区深草田谷町)
- 師団街道近辺〈Fig.2〉  
(京都市下京区塩小路橋東詰から伏見区国道24号線に至る)
- キトロ橋〈Fig.3〉  
(京都市伏見区深草キトロ町)
- 京都駅八条口近辺(京都市南区東九条西山王町)
- 観月橋近辺(京都市伏見区)
- 京都鉄道博物館・梅小路機関車庫  
(京都市下京区観音寺町)
- 陸上自衛隊 宇治駐屯地〈Fig.4〉  
(京都府宇治市五ヶ庄官有地)



〈Fig.1〉聖母女学院 本館

1908(明治41)年8月に、旧陸軍第十六師団司令部の庁舎として建てられたレンガ造りの西洋古典様式風の建築。農村地帯であった紀伊郡深草村(現在の伏見区深草)に、練兵場や陸軍病院などが整備され、深草一帯は軍都として栄えた。現在は、師団街道、第一軍道、師団橋、軍人湯といった名称が生活の中に溶け込み、当時の記憶が刻まれている。



〈Fig.2〉師団街道近辺



〈Fig.3〉キトロ橋



〈Fig.4〉陸上自衛隊 宇治駐屯地

日清戦争を契機に1894(明治27)年11月、旧陸軍砲兵工廠宇治火薬製造所が開所され、戦後に警察予備隊宇治管理補給部隊がこの地に駐屯した(後に陸上自衛隊関西補給処と改称)。現在も、駐屯地内には旧給水塔を含む21棟のレンガ造りの建物や木造の遺構が残っている。

## 2019年度 2階総合展示

# BEACON 2020

会期	2020年1月11日(土)～3月8日(日)
休館日	月曜日(祝日の場合は開館、翌日休館)
開館時間	午前10時～午後7時30分(入場は午後7時まで)
会場	京都文化博物館 2階総合展示室 京の至宝と文化
主催	京都府、京都文化博物館
助成	公益財団法人 花王芸術・科学財団
撮影協力	京都鉄道博物館、学校法人 聖母女学院、 陸上自衛隊 宇治駐屯地

## BEACON 1999-2020

1998年、京都。伊藤高志(映像)、稲垣貴士(音響)、吉岡洋(テキスト)、KOSUGI+ANDO(小杉美穂子・安藤泰彦、現代美術)から成る、五人のグループで交わされた対話の中から、《BEACON》は誕生した。始まりには「記憶」という問題、電子的なメモリ空間が急速に拡大してゆく環境における、人間の記憶という問題があった。記憶をめぐる私たちの思考を形にする方法として、回転台の上で風景を撮影し、回転台の上でそれを投影するというシステムにたどり着いた。それを私たちは《BEACON》と名付けた。何でもない日常風景の投影、自然音を基本とする音響、記憶をめぐる断片化された言葉、それらを同時に提示することが、作品《BEACON》の原形となった。

最初の展示は1999年、名古屋の中京大学アートギャラリー「C・スクエア」において行われた。この時に二つの部屋を使って、一方には《BEACON》を、もう一方には合わせ鏡と壁に沿う言葉の列から成る無限通路のインスタレーションを置いた。この最初のバージョンは、二年後の2001年に東京の

NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]における「テクノ・ランドスケープ展」の出演作品として再現された。

2004年には、大阪成蹊大学芸術学部のギャラリー〈space B〉(京都)において、展示空間自体を撮影することにより、場所との関係を深めることを試みた。この後6年間の休止期間を経て、2010年には京都芸術センター〈ギャラリー南〉において、新しい映像内容、展示場所との関係性についての実験、テキストの朗読を音響に取り込むなど、さらなる試みを行った。

2014年、演劇やメディアパフォーマンスをも含む「パノラマ・プロジェクト」においては、短い期間を挟んで東京と京都において別々の作品を制作することになった。まず東京都台東区の「葬想空間スペースアデュール」で発表された作品《BEACON 2014 memento》は、葬儀場という特別な空間の磁場に身を任せることで「死」に言及し、京都の元立誠小学校における《BEACON 2014 in flux》では、流れと生成変化のイメージをあつかった。回

作品《BEACON》は、伊藤高志(映像)、稲垣貴士(音響)、吉岡洋(テキスト)、KOSUGI+ANDO(小杉美穂子・安藤泰彦、現代美術)、五人の共同制作による映像インスタレーション作品のシリーズです。「記憶」という問題をテーマに、1999年以来少しずつ形態を変えながら各地で展示されてきました。灯台の光が周囲を照らし出すように、回転台上の二つのプロジェクターが、様々な風景を壁面上に浮かび上がらせ、再び闇に返します。

この展覧会では、新たに京都で撮影された映像、音響、テキストが用意され、新作《BEACON 2020》として展示されます。日常の風景の中で見過ごされてきた時間の痕跡を探り、京都の風景に蓄積した記憶の姿をたどります。

BEACON series of exhibitions is a collaborative video installation project, jointly produced by five artists: Takashi Ito (video), Takashi Inagaki (sound), Hiroshi Yoshioka (text) and KOSUGI+ANDO (Mihoko Kosugi + Yasuhiko Ando / installation). Since the 1999 exhibition on the matter of “Memories,” BEACON has been presented in many venues, gradually transforming the structure along the way. As light emitted by a lighthouse illuminates its surroundings, two video projectors on a rotating pedestal cast diverse scenes onto the walls, before slipping back into darkness.

Images freshly taken in Kyoto are combined with sound and text in a new production, named BEACON 2020. Seeking out impressions that have been overlooked amid day-to-day scenes, the exhibition follows traces of memories accumulated within perspectives of Kyoto.

を重ねる毎に、《BEACON》に通底するテーマである「記憶」に、少しずつ具体的な内容が充填されていったように思われる。

7回目の展示となる岐阜県美術館での《BEACON 2015 LOOK UP! みあげてごらん》では、希望、絶望、祈りなど様々な意味をもつ「みあげる」という動作に着目し、その動作を示す人びとの映像とともに、単純化された言葉のプロジェクション、また天井に不穏な影を落とす、フェンスの中で回転するプロペラのインスタレーションを展示した。そして映像の中では、神沖、福島、そして岐阜の日常風景が交錯することになる。

今回の《BEACON 2020》では、私たちはふたたび京都の風景をとりあげることにした。といっても、悠久の歴史に抱かれた古都ではなく、より近い歴史の痕跡がごく日常的な景色の中に堆積している、「もうひとつの京都」である。それらは、過去に想いを馳せる手がかりであるよりも、現在を生きる私たちと共に、今ここに存在している風景なのである。

BEACONプロジェクトチーム